Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

108

Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

108

多面体の内側に潜む
我々の隠された属性
あと、過去とか未来

プロローグ

「あなたは今、そこにはいない」

いきなりこう言われたら、あなたは一体どのように感じるでしょうか？

あなたは、あなたが「ここ」と認識している場所にれっきとして存在していると思っているし、それに対してなんの疑いも感じてこなかったはずです。

もしここが崩れたら、全ての前提が崩れ去る。

この世界の前提も、あなた自身に対する前提も。

あなたは今、ここにはいない。

では、あなたが「ここ」と認識している世界や、あなたが「今」と認識している時間感覚、あなたが「私」として認識しているものや、あなたが「誰々」として認識している人物、もの、そして現象とは一体何なのでしょうか。

「ここ」は存在していない。

もしこれを前提とするなら、あなたの目に映っているものや経験している事柄は、全て幻だということになる。

そして、あなた自身も。

では、これを読んでいるあなたとは、一体何者なのでしょうか？
その「あなた」という感覚を生み出しているものとは、一体何なのか。
本当のあなたとは一体全体どこにいるのでしょうか？
そして、本当のあなたとは何者なのか？
そもそも「本当の」って、何？

「パラレルワールド」という言葉を聞いたことがおありでしょうか。

パラレルワールドとは「並行世界」という意味です。

これは平たく言うと、我々が常に経験中である「唯一の現実」だ

と思っている「この世界」と並行して、**別の現実世界が同時並行的に存在している**という考え方です。

その並行世界にも「あなた」が存在している。あなたはそこで、この現実世界とはまったく別の経験をしているのです。

あなたが「あのとき、もしこうしていたら…」と後悔している過去の出来事についても、その「もし」を選択して実行した世界が並行して存在している。「もし」から分岐して別の人生を送っているあなたが、今のあなたと同時並行的に存在しているのです。

そしてあるとき、今のあなたと「もし」を選んだあなたとが、何かの拍子に入れ替わる…。

これはＳＦなどで非常に多く用いられるモチーフです。「もしこうだとしたら…」という想定上の世界を経験できるという可能性は、私達の好奇心を刺激し、胸躍るファンタジーとして楽しみを与えてくれます。

ところが実際には、これは空想上のファンタジーでもなんでもなく、日常茶飯事に起きていることなのです。

にも関わらず、あなたはそれに気付いていない。一つのラインに固定された唯一の現実世界だけを経験し続けていると思っている。

しかし本当は違うのです。

結論を先に言いましょう。

この世界は無限に重なる並行現実で出来ています。

詳しく言うと「並行」というより「多層」と言った方がより近い表現になります。

どこかの地点から分岐した並行世界が展開していると言うより、気が遠くなるような無限の可能性が実際の現実世界として、多層的にかつ物理的に存在しています。

そして我々は、その中のどれでも自由に選ぶことが出来るのです。

「ちょっと待って、頭がボーッとしてきた。ということは、私はこれからの先の人生を好きなように選択できるということ？」

そのとおりです。「未来は無限の可能性を持っている」と学校で習いませんでしたか？いや、これは学校では教えてないかもですね。

しかしこの言葉は、我々が幼い頃から童話や小説、テレビドラマやコマーシャルなどあらゆるメディアを通して散々聞かされてきた、とても美しい響きのある言葉です。でもこれは嘘っぱちの美辞麗句などではなく、本当のことなんですよ。

しかもこれは、わざわざパラレルワールドの概念など用いなくても、常識の範囲内で考えたとしてもそのとおりです。

「未来はあなたの手の中にある」

これは誰もが比較的容易に受け容れられる、ごくごく一般的な考え方のはずです。

「でも実際問題として、私に提示されている『未来に対する選択肢』は、現状によって極めて制限されているよ。極論を言えば『私は明日アメリカの大統領になりたい』と考えたとしても、法律的・物理的などあらゆる観点から考えて、どうやっても無理でしょう?」

いいえ。「あなたが明日アメリカの大統領になっている現実」は、既に物理的に存在しているのです。そしてあなたはどの世界でも自

由に選択可能なのです。つまり「あなたが明日アメリカの大統領になる」ということは可能なのです。

「そんな馬鹿な！じゃあじゃあ、過去についてはどうなの？確かに未だ確定していない未来に関しては無限の可能性があるのかもしれない。でも、既に過ぎ去った過去を変えることなんて不可能でしょ？もう起こっちゃったことなんだから。

それなら、結局はこれまでの過去の集積から導き出された『制限された選択肢』に基づいて未来を選択するしかないよね。

だったら、やっぱり自由ではないよ。それとも、既に確定している過去が変えられるとでも言うの？」

過去は変えられます。実は未来と同様、過去も確定などしていません。

あなたが「既に確定した過去」としている事象は、今現在あなたがそう定義しているだけのものに過ぎません。実際には、過去も現在も未来も、どれも何一つ確定していません。

確定しているものなど何もないのです。

あなたは、あなたの経験における「どの時系列上のどの事象」についても、自由に選択可能です。それによって今のあなたの属性が「暫定的に」確定される。

それだけのことなのです。あなたは常にそうやって自分自身の属

性を定義づけています。

逆に言えば、あなたが過去や未来の経験と全く関係なく「今のあなた」を定義すれば、過去や未来はそれに伴った形で変わります。そして暫定的に確定されるのです。そんな単純なことなのです。

「そんな…それじゃまるで魔法使いだよ」

そうです。あなたは魔法使いです。あなたにとっての不可能なんてどこにもありません。

ところがあなたは「そんなわけない」と考えています。言わば洗

脳されているのです。だから「そんなわけない現実」を無意識に選択するしか無くなっているだけの話なのです。

この本は、この間違った洗脳を解くお手伝いをします。

しかし、あくまでも「お手伝い」です。

というのも、洗脳を解いて魔法使いに戻るかどうかはあなたの自由だからです。この本を読んでその内容を理解したからといって、あなたが自動的に魔法使いになるというわけではありません。

あなたが洗脳されたまま、無意識的に制限された選択肢の中で今までどおりの人生を送りたいと思っても、それは自由です。この本を最後まで読んだとしても、そしてそこから何かしらの感銘を受け

たとしても、洗脳状態のままで生きていきたいと「無意識に」選択する人が大多数だと思います。それは先にお断りしておきます。

しかしそれでも、あなたがこの本に書かれたことを99％疑って信用しないとしても、残りの1％で「ひょっとしたら」と感じたことによって、あなたの人生は激変する可能性を秘めているのです。その胸躍るファンタジーをまずは経験してみてはいかがでしょうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この本は、私の今までの著作とは表現形式のアプローチを意図的に変えてあります。

続編もあらかじめ予定されています。これも初めてのことです。

この本で扱うテーマは簡潔に説明することが非常に難しいため、どうしてもこういった手法を取らざるを得ません。

特に今回の第一弾は全体の序章にあたりますが、なかなか本題に入らないような印象で、やきもきする気持ちになってしまう読者の方もいらっしゃるかもしれません。やたらと回りくどい説明が多いなと感じられるかもしれません。

しかし一方では、肩肘を張らなくても楽しく読める内容となっているはずです。必要以上に深刻に捉えず、一つの読み物として楽しんで頂ければと思っています。

そしてこの本を読み終えたとき、あなたは並行世界への移動に必要な初歩的な準備を完了した状態となっているでしょう。

このシリーズは私のライフワークになるかもしれません。皆さんもどうぞゆっくりと、気楽に楽しみながらご一緒ください。

それでは並行世界への旅、スタートです。

パラレル　インデックス

プロローグ　1

Act 1

錯綜する宇宙　25

星空は存在するのか　26
それぞれが固有の世界を経験している　48
無限のバージョンで存在するあなた　53
一秒後という別世界　56
消滅する可能性　60
静止する世界　74

Act 2

時の終わり 93

世界の終わり 94

伸縮する時間 106

Act 3

死という分岐点 115

死の瞬間 116

死の感想 121

明かされる真相 130

生という選択 138

Act 4

他人というあなた　151

死という信念の終わり　152
不死の身体　155
遺体という信念　159
信念を終わらせるイベント　166
創作される現実　172
共有という名の幻想　178
並行する現実　181
立場という分身　189

Act 5

選択権 195

噛まれる犬の選択権 196
虚偽のゲーム 208
矛盾する現実 214
整合性の放棄 219

Act 6

並行現実 225

歯止めをかける思考 226
矛盾を認めない信念 238

Act 7

満ち渡る愛 255

現実という焦点 256

増殖するあなた 264

別バージョンという愛 279

エピローグ 293

Act 1

錯綜する宇宙

星空は存在するのか

今がもし夜なら、窓を開けて空を眺めてみてください。無限に広がる宇宙には、それこそ無数の星がちりばめられているはずです。

美しい満天の星空をしばしご堪能ください。

「そんなもの見えないよ。ネオンや街灯の一切無い、空気の澄み切った田舎とかならともかく、高層ビルの建ち並んだ都会のど真ん中に住んでいる私の家からは、無数の星なんて見えるわけがない」

それは失礼しました。確かに大都会の夜空なら、満天の星空と言

うにはほど遠い状態かもしれません。

では、ネオンも街灯もない「ド田舎」に住んでいるあなた。あなたの部屋の窓からはきっと美しい無数の星空が見えていることでしょう。

「見えません。そりゃ晴れた夜なら綺麗な星空が見えることもある。そんな時は田舎に住んでいて良かったなと心から思いますよ。でも今夜はあいにくと曇り空。いくら田舎だからって、そうそう満天の星空なんて見えないですよ」

そうでしたか。こりゃ失礼。確かに天候や地域によって星の見える度合いは違うでしょうからね。気を悪くされたのなら謝ります。

どうもごめんなさい。

ではお尋ねします。

あなたに見えようが見えまいが、宇宙には無数の星がきらめいているはず。

にも関わらず、それを認識できる人と出来ない人とがいる。

つまり、満天の星空を経験できる人と出来ない人とがいる。

なぜなんですか？

「…いや、だからそれは、夜空を観測する人の地理的状況や気象条件

「に左右されるからでしょ。満天の星空が見える条件下にいる人もいれば、そうでない人もいる。それだけの話だよ」

でも実際には満天の星空なんですよね？

「そりゃそうでしょう」

あなたには今、満天の星空が見えているんですか？

「見えていませんよ」

では、どうしてそう言いきれるのですか？

パラレル

2011 年 11 月 30 日　初版第1刷発行

著者　　108
発行　　インテグレイテッド・インフォ

©108
All rights reserved

本書は著作権法によって保護されています。
本書の内容を無断で転載、記載することは禁じます。
本書を無断で譲渡・転売することを禁じます。